



Title	中屋昌子『信仰と越境のウイグル：「進歩」の共和国から復興のイスラム共同体へ』京都:文理閣、2023年、164頁
Author(s)	田中, 周
Citation	日本中央アジア学会報, 20, 99-100
Issue Date	2024-11-30
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.20.99
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98901
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	journal article
File Information	JB20_018tanaka.pdf



中屋昌子『信仰と越境のウイグル
——「進歩」の共和国から復興のイスラム共同体へ——』
京都：文理閣、2023 年、164 頁

田中 周

冷戦の終結はナショナリズムと宗教的アイデンティティの再燃をもたらし、世界的な宗教復興が生じるとともに、各地で民族や宗教をめぐる紛争が顕在化した。このことは国境を越える超国家的な存在である宗教に対する、近代国民国家システムの限界を露呈したとも言える。イスラムと国民国家をめぐるのはこれまで多くの研究がなされてきたが、本書は両者のせめぎあいの関係性に新たな視座を提供するものである。

本書は、中国共産党の宗教政策はどのようなものか、改革開放以降に新疆で生じたイスラム復興はどのように進展したか、新疆から離散したウイグルがトルコでどのような宗教的コミュニティを創出しているか、という問題意識に基づいている。そのうえで、特に改革開放から2010年代半ばまでの時期を対象として、イスラム復興によって故郷からの離散を余儀なくされ、離散先でコミュニティを形成する人々を指す「イスラム復興ディアスポラ」という概念を軸に、新疆からトルコに亡命したウイグルの実態を分析する。

本書の構成は以下のとおりである。序章で本書の問題関心、先行研究上の位置づけ、核となる概念、調査概要等をおさえたうえで、第1章「新疆における宗教統制の成立過程」は、中華人民共和国建国から改革開放までの中国共産党の宗教政策の変遷と、イスラムを支柱としたウイグル社会の変容の模様を提示する。第2章「新疆におけるイスラム復興と宗教統制」は、中国共産党の宗教政策・法体系の背景にある理論的枠組みを明らかにしたうえで、イマーム、女性信徒、未成年者に対する宗教統制の実態を分析する。第3章「サラフィーのウイグル」は、2009年7月5日に生じた「ウルムチ事件」の実態と、事件がウイグルを亡命に走らせた事例を紹介する。第4章「民族主義者はいかにイスラムの覚醒を経験したのか」は、トルコに亡命した世俗的なウイグルが亡命後に敬虔なムスリムとなった事例を紹介する。第5章「スーフィーはなぜトルコに来たのか」は、1980年に中国を離れ、1990年代初頭にトルコに亡命したウイグルの事例を紹介する。第6章「トルコで見出したイスラム共同体」は、亡命したウイグルを支援するためにトルコで設立されたNGO団体を事例として、イスタンブル

におけるウイグルコミュニティの実態を分析する。終章は、ウイグルのイスラム復興ディアスポラが、イスラム復興が急速に進むトルコで、信仰に篤いトルコ人とともにイスラム的共存システムを育みつつ、コミュニティを拡大させてきた様を総括する。

本書の特色は、トルコ・イスタンブール県および新疆ウイグル自治区において、2010年から2023年にわたって実施した聞き取り調査を主軸とする現地調査の成果に立脚している点にある。特に第3章から第6章でスポットライトを浴びる複数のウイグルが生々しく語る、越境に至る経緯、宗教的な覚醒、亡命先のトルコに至る過程等をめぐる経験には衝撃を受ける。本書のこれらミクロレベルの事例は、いずれも得難く貴重な情報を提供すると同時に、ウイグルが経験した信仰と越境の世界を、色彩豊かに我々に提示することに成功しているといえる。

最後に今後の著者に対する期待として、以下の二点を指摘したい。第一に、第3章から第6章の事例の主軸を担う聞き取り調査は、いずれも男性を対象としている。これと同程度のウイグル女性の経験と思想に関する調査結果が加われば、物語はより重厚さを増すであろう。第二に、本書はウイグルのイスラム復興ディアスポラを受け入れるトルコ住民と同様に、ウルムチ事件をめぐるレジェップ・タイイップ・エルドアン首相(当時)のウイグルに寄り添う姿勢、およびトルコとウイグルのムスリム兄弟としての連帯を強調するトルコ政府の姿勢を好意的に描いている。ただし、エルドアン政権にはムスリムの擁護者としての顔もあれば、中国を重要な戦略的パートナーと位置付けて、両国の関係強化を図るためにその新疆政策を肯定的に評価する顔も持つ。これらの顔は国際政治状況や選挙等をめぐる国内政治状況に応じて使い分けられてきた。このようなトルコ政治の奥行きに対する視角が加われば、本書の魅力はより増すものと考ええる。

(東京大学先端科学技術研究センター)